

医療法人正和会介護老人保健施設 ほのぼの苑 (秋田県潟上市)

多職種協働で低栄養状態の リスクを回避しつつ 在宅復帰に向けて経口移行に取り組む

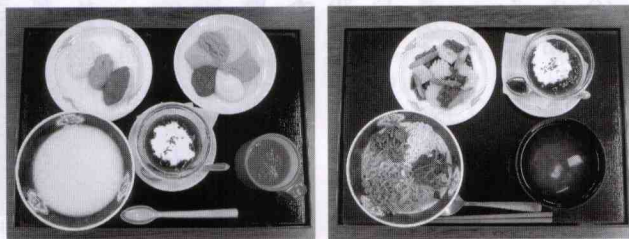
経管栄養で入苑する利用者の多い同苑では、経口摂取移行に向けてチームアプローチを展開。そのうちの2割を経口摂取可能な状態に改善し、在宅復帰に結びつけている。

摂食意欲向上のため徹底した嗜好調査と個人対応を行なう

八郎潟の湖畔に位置するほのぼの苑。同苑は平成8年の開苑以来、併設・関連機関として内科・整形外科・眼科・歯科が同じ敷地内にあるという恵まれた環境のなか、それらの医療機関と連携しながら、



入苑者の食事介助を行なう言語聴覚士の奥山香里(左)さんと、その様子を見守る管理栄養士の佐々木智子さん(右)



毎月1回提供している行事食。右が常食で左がトロミ食。トロミ食ではすべての具材を別々にミキサーにかけて盛り付けている

ら、入苑者の早期在宅復帰をめざしている。同苑の定員は100人(通所定員は50人)。このうち平成15年の段階で約半数が経管栄養者だったという。

「経管栄養の方々に、摂食・嚥下スクリーニング検査を行なってみると、実は摂食・嚥下機能にあまり問題がなく、ある

程度口から食べられる状態であることも少なくはないのです」と語るのは、同苑の管理栄養士である佐々木智子さんだ。

実際に平成16年4月に入苑したある人がそうだった。経鼻でチューブが入っていたがすぐに抜去してしまつたため、医療機関に両手を拘束されていた。拘束はしない主義である理事長の小玉敏央医師は、入苑直後両手を自由にさせるように指示。すると、入苑者はすぐにチューブを抜去してしまつたため、同苑に常勤する言語聴覚士の奥山香里さんは、摂食・嚥下スクリーニングを行なつた。

「口腔内の衛生状態に問題はありませんでした。空嚥下でもむせがなく、発語もはっきりしていましたので、経口摂取可能と判断しました」(奥山さん)

この評価をふまえて、小玉医師と奥山さん、佐々木さんで検討した結果、全粥・さざみ食の摂取が可能と結論。佐々木さんは早速、食事を提供したが、本人の摂食意欲が低く、数口で拒否する状態だった。

「おやつや甘いジュースは好んで摂取されたのですが、食事はほとんど手つかず。何とか食べていただけなかつたかと、本人はもちろん、ご家族にも頻りに聞き取り調査を行ないました」(佐々木さん)

佐々木さんは何度も居室に足を運び、家族への聞き取りも行なうなかで、「麺が好きだった」という情報を入手。毎食全粥とソフト麺を半分ずつ提供したところ、少しずつ摂取量が増えた。ただし、全粥